

谷崎潤一郎

新々  
源氏物語  
別卷



谷崎潤一郎

新々源氏物語 別卷

中央公論社



新々訳源氏物語別巻奥付

昭和四十年十月十日印刷 昭和四十年十月二十日発行

訳者谷崎潤一郎 発行者宮本信太郎 印刷者高橋武夫

発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地

定価四八〇円

## 凡 例

一、新々訳源氏物語の附録として、本文の理解を助け、鑑賞に資するために、隆能源氏物語絵巻、年立図表、人物略説、人名名寄、主要人物官位年齢一覧の五篇をおさめて、別巻とした。

### 一、隆能源氏物語絵巻

世に隆能源氏と呼ばれている源氏物語絵巻の全図を掲載した。現存する十九図は剥落変色があつて、複製では判然としにくい点も多いので、大河内久男氏に復元臨模してもらい、これをハイレイト版に附した。この復元については、国立博物館美術研究所の秋山光和氏らの最近の研究、特に衣裳に関する鈴木敬三氏の研究に負う所が多い。

### 一、年立図表

年立を北村久備の『すみれ草』にならつて図表にしたものである。「幻」までは光源氏の年齢を上欄に記し、「勾宮」以後は薫の年齢を上欄に記した。

### 一、人物略説

本文に登場する全人物を、五十音順に配列して、各人物に簡単な解説をつけた。冒頭には、人物及び家系の一覧を

兼ねて系図を掲げ、系図に出ない人物は帖ごとに（二帖以上に見える人物は最初の帖に）一括して置いた。歴史上の人物とか他の作品の主人公とかについては、一覽だけを示して、解説は省略した。

人名の混雜を避けるため、同一人物についてはただ一つの呼名を通称として採用し、かつ同名異人のないように命名に工夫をした。やむを得ず同名異人を生ずる場合には、呼名の下に《帖の名》《父の名》《配偶者の名》《主人の名》などを附したものを通称として、これを区別することにした。人名名寄においても同様である。

#### 一、人名名寄

本文に現われる諸人物のさまざまな呼名をほとんど網羅して、それらが誰をさすかを知るに便宜をはかった。

上段に本文中の呼名を五十音順に並べ、下段にその人物の通称（人物略説の凡例参照）を掲げて、人物略説と照合できるようにした。下段の――は、上段の人名と同一であることを示す。

#### 一、主要人物官位年齢一覽

しばしば登場する人物の官位や年齢を一目瞭然たらしめるためのものであって、右端の行に卷名を記し、年立図表との照合に供した。

横に見れば、同一年における各人の官位や年齢を知り、縦に見れば、各人の官位変遷の跡を追うことができる。一人一行とし、官位関係の主要事項を記入した。官位が前年と変らない場合は――を以てこれを示し、明らかでない場合は空欄にして置いた。

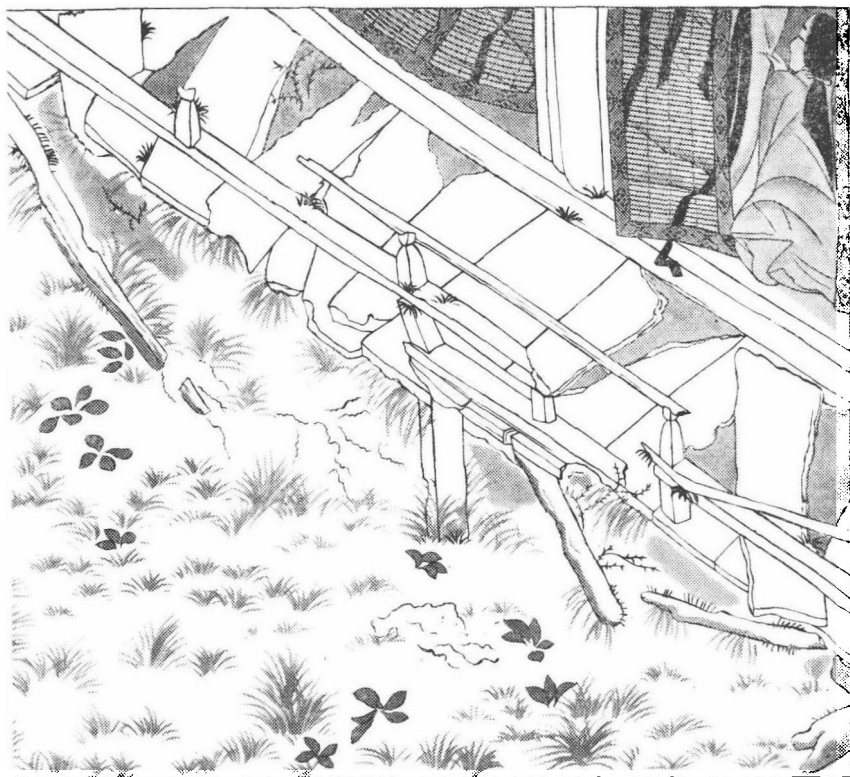
年齢が計算できる人物については、各欄の上に数字でこれを示し、本文に明記してある場合には特にゴチック活字にした。

別卷目次

|            |    |
|------------|----|
| 凡例         | 一  |
| 隆能源氏物語繪卷   | 三  |
| 年立図表       | 四  |
| 人物略説       | 九  |
| 人名名寄       | 一八 |
| 主要人物官位年齢一覽 | 二九 |



隆能源氏物語絵巻



## 蓬生

(一五一頁以下。特に一五五頁参照)

四月、末摘花邸。

月光に映える律、蓬生。

左端に松の枝にかかる藤。

その下に、光源氏、烏帽子直衣姿（通常服）。立烏帽子。縹に花菱三重襷文様の直衣。指貫の袴のそばを取って歩む。浅沓をはく。

後から、褙折傘をさしかけられている。先行する惟光、やや萎えた烏帽子に狩衣。馬の鞭を手にしている（この鞭は太すぎる）。顔は、隆能源氏では下ぶくれに描くのが普通だが、惟光はそうでない。顔の形で貴賤を現わしてあるのであらう。



右端に、荒れ果てた簀子すいこ、庵くまし、御簾みす。御簾の内側にある几帳の帷かたはらや野筋のすじもひどく痛んでいる。

人物は、本文にある取次ぎの老女か。特異な顔である。



## 関 屋

(一六四頁あたり参照のこと)

九月末、逢坂山、左に平地、左上に琵琶湖打出の浜。現存する隆能源氏物語絵巻中では唯一の山水画である。

(この図は、山水を描いた上に、人物を描き込んだので、剥落がはげしく、不明な点が多い。写真版などではほとんど分らない。いまだできるだけ復元してみた。)

この狭い画面に山を幾重にも描き、逢坂山を越えて進む源氏の一行を点綴する。右端の谷間は、関の清水のつもりなのであろうか。

傘持ちその他白張<sup>はくちよう</sup>三人、その前に騎馬の



隨身（立烏帽子に緋の狩衣）。

その向う先にあるのは、道祖神の祠か。

山を越して左に向う牛車は、源氏の料か。

山を降りた所に騎馬の前駆が二人、前方

から来る女車に注目している様子。

左方には、打出の浜にかけて、常陸介の

一行を点綴する。

先頭には女車（牛飼童は剥落して復元し

えなかった）、車の横に立烏帽子狩衣の

従者五人、車の後に同じく二人。

後方に続く牛車の後を行く騎馬の烏帽子

狩衣姿が常陸介か。従者二人。

浜を歩ませる騎馬の侍、従者一人。

さらに後方に、馬二頭と人。

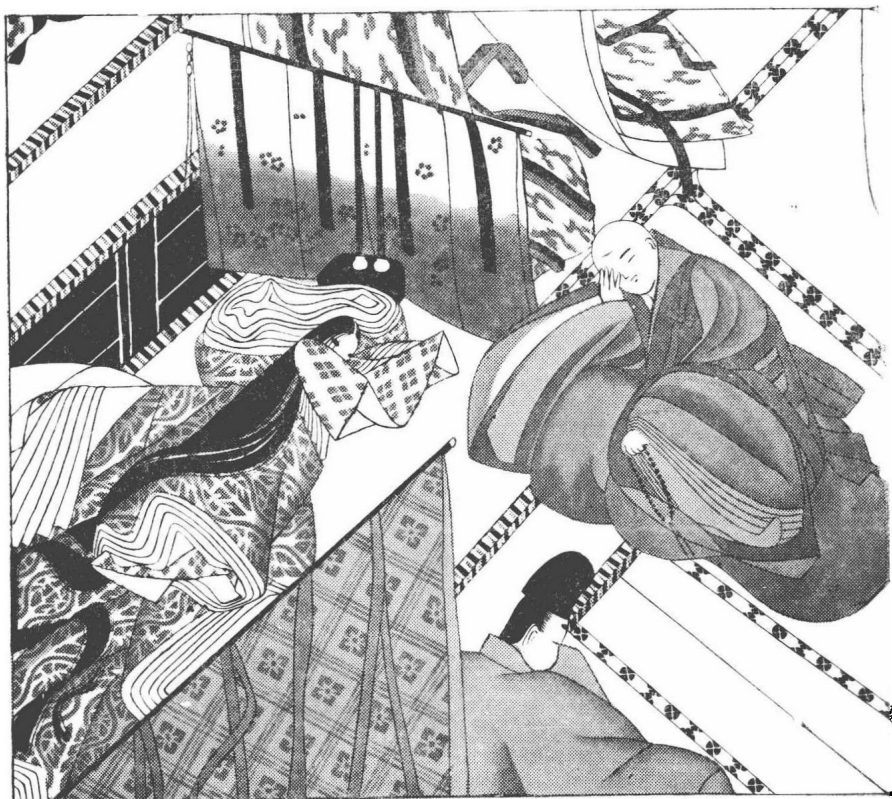


## 柏木一

(二四頁九行目ノ一八頁)

六条院の女三宮の部屋。

左、女三宮の背後にある黒塗りのものが、御帳台の浜床の側面である。その上に縹綱縁の地敷、さらにその上に中敷が敷いてある。この図の左上端に、ほんの少しだが、御帳台の帷を巻き上げて野筋で括ったところが見えている。女三宮の上方の三尺几帳の上から右にかけて見える朽木形文様の帷と黒い野筋は、御帳台の隅に垂れるもので、これは巻き上げない。大文高麗縁の畳を敷いた上に、縹綱縁の地敷を載せ、さらに同じ中敷を重ね、几帳で囲った中に、女三宮がいる。白の繁



菱の単の袖で顔をおおっている。白綾の桂（立涌文様）、下には白の五重の衣を着る。白なのは、御産のあとだからである。枕もとにあるのは、三尺の美麗几帳、その内側が見えている。蘇芳の裾濃、銀で梅鉢と群千鳥の文様である。

脇の几帳は四尺、三重襷花菱文様。

光源氏、立烏帽子に文様不明の白い直衣（宿老の通常服）。

朱雀院、下に白い衣に白い指貫、上に墨染の法衣に五条の袈裟。  
女房四人は裳唐衣姿である。

# 柏木二

(二二頁五行目ノ二五頁六行目)

二月、柏木の病室である対の屋。

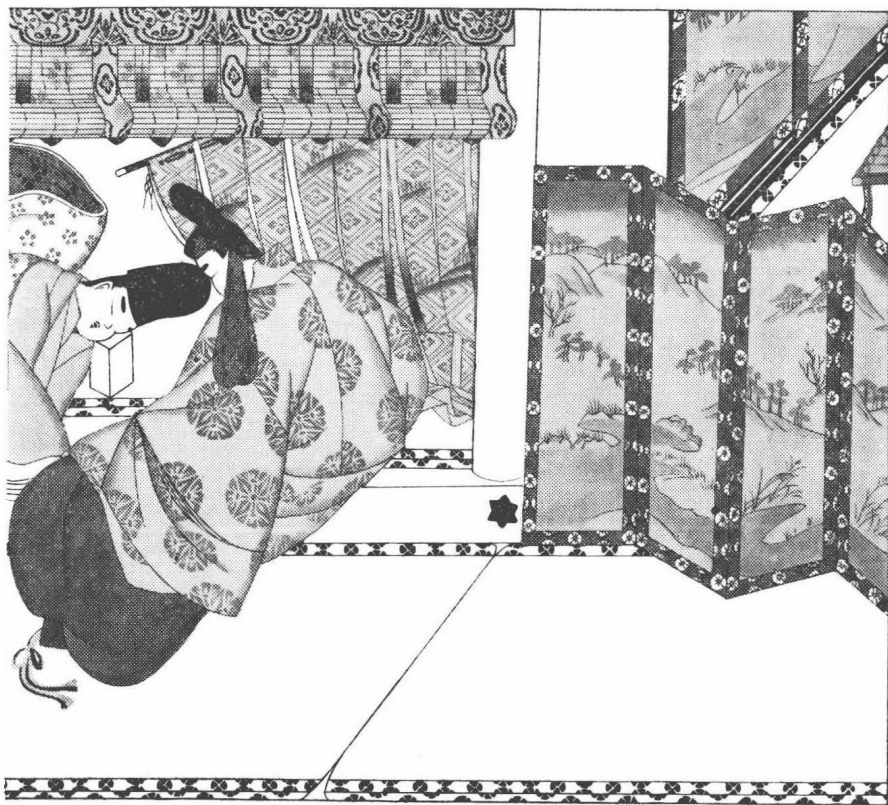
母屋と廂の間の境、左の間は壁代を垂らし、右は巻き上げてある。

柏木、立烏帽子、衣は無文の白絹。衾は廣袖、白の浮織文、袖口に赤の平絹の裏が見える。枕を縦にして、やや上半身を起す姿である。

枕もとの美麗几帳は、四幅三尺か。

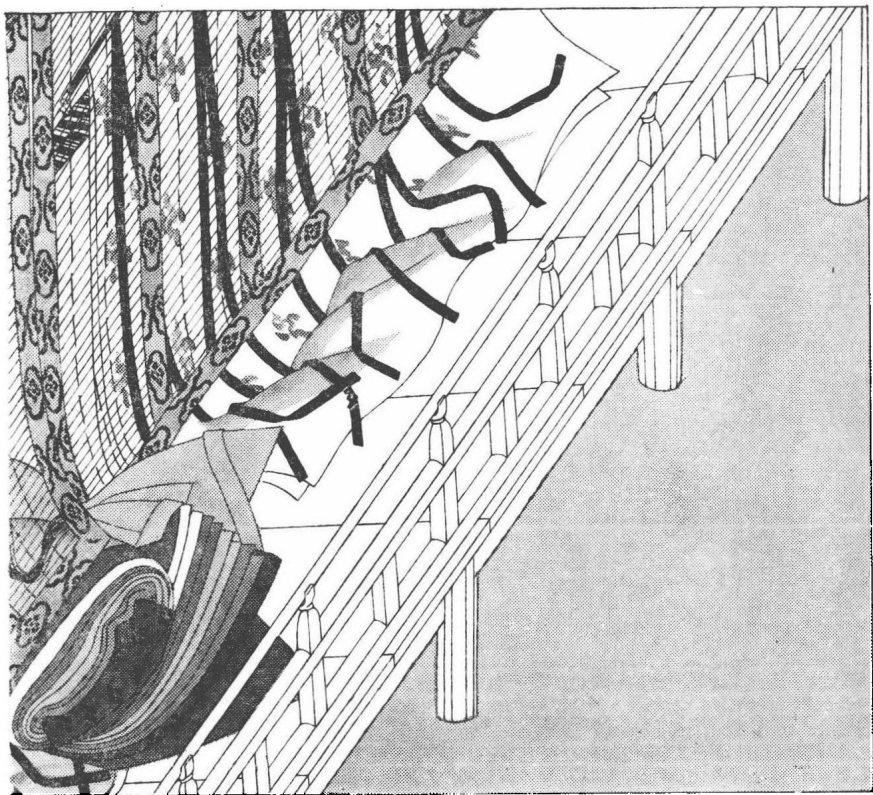
夕霧、冠直衣姿。冠は透額の繁文。直衣は、表は白の浮線綾、裏は二藍。指貫は藍地無文。

女房五人、唐衣は略して、裳だけを着ている。





病床近くに侍するため、上には白を着て  
いる。



# 柏木三

(二六頁九行目・三〇頁八行目)

三月、薰の五十日の祝い。

寶子と廂の境の御簾の内側には五幅四尺の几帳を立てつらねてある。

光源氏、冠（透額繁文）直衣（白襲）姿三本ずつ二列に高杯たかづきが立ててある。五十日の祝いに若君に含める料のものを載せてある。

左上端の御簾の向うに、几帳の裾が見え、その奥に女三宮がいることを示す。

左下の侍女二人は、裳唐衣の礼装である。